

# 現代中国における聖書研究の発展とその研究課題

袁 浩春

## はじめに

東アジアでは、日本と韓国は既に 19 世紀後半から聖書研究への関心を示し、それぞれの研究成果を残していたが、中国の場合、とりわけ近代中国以降の複雑な政治的事情の中で、聖書研究は、1980 年以降からようやく形成され、今日（2018 年 9 月現在）まで、40 年ほどの研究史しかない。中国におけるこの分野の形成のきっかけ、またどのように発展したのかを示すために、現在までの中国国内の聖書研究を顧みながら、本稿を用意した。

## 1. 中国の聖書研究の形成期（1980 年から）

中国文化と聖書との最初の接触は 7 世紀の景教の伝来によるものであり、その時から、聖書の漢訳を巡る問題が始まっている。その後のイエズス会会士とプロテスタント系の宣教師たちは、聖書の漢訳の問題を意識しながら、宣教に力を入れ、明代及び清代には大量の中国人基督教徒を育ててきた。しかし、学問上の聖書研究は、20 世紀初期のミッションスクールと大学の設立の後から始まっている。そういった教育機関の増加をきっかけに、20 世紀の初頭の中国の新文化運動が引き起こされ、宣教師を経由して、人文科学への関心が高まっていった。しかしながら、そういった状況が根づく以前に、軍閥の乱立、第一次及び第二次世界大戦、共産党・国民党内戦、大躍進政策及びプロレタリア文化大革命という一連の歴史的事件によって、中国における学問研究が長い頹廢期に入った。例えば基督教研究の場合、中国社会科学院（Chinese Academy of Social Sciences, CASS）の資料によれば、1949 年から 1978 年までの 29 年の間、基督教に関する専門図書の出版は一冊もない。また、基督教に関する研究論文は 48 本しかない。その上、この 48 本の論文は、いずれも政治的な見解が強く、基督教に対して否定な立場から論じている<sup>(1)</sup>。しかし、その状況を一変したのは、鄧小平による「改革開放」政策の出現である。彼が提唱した文化、経済、教育上の開放政策によって、中国の高等教育が激変し、共産政府が成立して以来、常に抑圧されてきた学術研究がより自由に行われるようになった。

### 1-1 朱維之

相対的に自由な研究環境に変化した中国学術界において、最も早く聖書研究を意識した者は、朱維之（1905～1999）である。彼は 1941 年の時点で既に『基督教と文学』<sup>(2)</sup>という著作を完成させ、中国における聖書研究への関心を示したが、残念ながら、そういった関心と研究成果は後の「文革」期間中に、紅衛兵たちの批判的となり、ひどく迫害され、研究活動を中止せざるを得なかった。しかし、こういった迫害された経験から、彼は聖書中の知恵文学である伝道書とヨブ記に強い共感を示した。そして、「文革」の終焉した 1978 年から再び研究に戻り、1980 年には中国の文学学術誌『外国

文学研究 (*Foreign Literature Studies, FLS*)』に「ヘブライ文学導入—『旧約聖書』への文学探検 (A Short Introduction to Hebrew Literature: Exploring the Literature of the Old Testament)」<sup>(3)</sup>を発表した。

彼はその論文の中で、漢訳聖書である『和合本 (*The Union Version*)』の伝道書とヨブ記のそれぞれの韻文に含まれた「無意味」への哲学的な思想を中国古典である『道德経』と『孟子』の思想と比較し、それぞれの共通点を示した。この論文は、近代の歴史批判及び文学類型を中心とした聖書研究というより、むしろ古代オリエントの韻文と古代中国經典との比較研究に思われる。また、彼のその論文に書かれた聖書理解は中国語訳文に対する彼自身の直感的な解釈であるため、後の中国研究者からも数多くの批判を受けた。しかし、その論文に対する批判は、1978年以前の政治的な立場によるものではなく、学術的な立場からのものであるため、朱維之の研究は「文革」以降の聖書研究の新たな起点を意味している。

なお、後に朱維之は「聖書の地位と特質」<sup>(4)</sup>の中で、F・エンゲルスの『自然の弁証法』の序に書かれたルターの聖書翻訳及びその言語と文学分野への影響<sup>(5)</sup>に言及し、西洋各国の文学分野における聖書の重要性を強調した。その論文の中で、朱維之は西洋文学に対する広い知見を披露したものの、1980年の論文と違って、中国の經典及び近代の中国文学に多くは触れなかった。それ以降、朱維之は文学研究活動の他に、大学の文学教育用テキストの編集にも取り組み、研究者の育成に力を入れた。

## 1-2 朱維之以降の研究者

朱維之が1980年に投げた賽によって、多くの研究者が聖書研究に関心を持ちはじめ、次々に聖書研究に関する論文を発表した。この時期に関して、スロヴァキアの比較文学者 Marián Gálik は1949年以前の聖書に関心を持つ文学者に触れつつ、朱維之をはじめとする1980年から1992年までの中国聖書学者とそれらの研究論文を整理した論文「中国での聖書への受容 (1980~1992): ある比較文学者による考察」<sup>(6)</sup>を1995年の『アジア・アフリカ研究 (*Asian and African Studies, AAS*)』に発表した。彼の整理に従い、朱維之以外の研究者を概観してみよう。

牛庸懋の「聖書についての覚え書き」(1985)<sup>(7)</sup>と朱韻彬の「聖書の雅歌—雅歌に関する学説と幾つかの見解」(1985)<sup>(8)</sup>は、いずれも雅歌の韻文を中心とした研究論文である。牛庸懋は中国古典である『詩経国風』といった男女愛を描く作品を比較対象として、雅歌の男女愛の表現を中心に韻文の特徴を分析した。また、彼は詩編を「説教性を持つ宗教詩」と評している。後者である朱韻彬の論文は、主に朱維之の個人による直感的な韻文理解への批評から展開している。彼は朱維之による韻文理解より、作品自身の文学類型と構成要素の重要性を強調した。その研究の延長として、彼は同年に「聖書における原始小説の基本研究」(1985)<sup>(9)</sup>を発表し、文学類型の分析を通してヨブ記を未成熟と評する一方で、中国古典小説『西遊記』との比較からエステル記の文学価値を高く評価した。

文学と詩学に関連する聖書研究の他に、聖書の神話的側面に着目した研究もある。その代表的研究者が、都本海と劉連祥である。都本海は、1986年に発表した論文『『旧約』における二つの創世神話を混同しないでください』<sup>(10)</sup>の中で創世記1章の天地創造神話と2,3章のエデン創造神話との区別を紹介した。更に、1987年に発表した『『旧約』における六日間の創世物語の純なる本質の

研究」<sup>(11)</sup>と『旧約』における神々の創世神話に関する美学の尺度」<sup>(12)</sup>の中で、創世記の最初における唯一の創造主の表現語の一つ——「神」を意味する「el」の複数形である「elohim」について、彼が調べる各地の創世神話との比較を通して、その意味と創世記神話との統合を説明した。彼によれば、「elohim」という創造主の呼び方は「神々」を意味しておらず、実際、ヘブライ神話の統合者は、創造主が唯一であることを信じていた。しかしそれ以前のカナンの先住民の間では、唯一の創造主という概念が未だ形成されておらず、創造神話の創造主は「神々」であった。つまり、「elohim」は元々カナンの先住民による表現であるが、ヘブライ神話の形成期以降、司祭もしくは長老と思われる人に統合されたのである。このような考察の後、都本海は、創世記 1 章の創世神話について、美学的側面において比類がないと評価した<sup>(13)</sup>。Gálik は都本海の世界各地の創世神話への理解に感服する一方、中国の創世神話に関して言及していないことに遺憾を示した。

聖書を神話学からアプローチしたもう一人の人物である劉連祥は、「聖書のエデン神話と母の原型」(1990)<sup>(14)</sup>の中で、ユングの神話原型批判理論を用いて、創世記 2, 3 章のエデン神話について独自の見解を述べた。彼はエデン神話の構成要素及び創造主の言語描写の中から多くの女性的な要素を見出して、第二の創世神話における女性要素の重要性を強調した<sup>(15)</sup>。文中で度々使用された「母なる性質(母系気質)」という用語をより明確に定義できれば、彼の研究の完成度はより高く評価されるだろう。

なお、Gálik は論文の最後に梁工の研究も紹介したが、本稿の整理に合わせるため、次節で紹介する。いずれにしても、中国の聖書研究は、その初期段階である 80 年代から 90 年代までの間、主に旧約の韻文と神話を中心としていることがわかる。

## 2. 中国の聖書研究の発展期

Gálik の論文は形成段階中の中国の聖書研究を紹介するものであり、その中には、梁工の研究も含まれている。しかしながら、梁工の研究と実績は、中国の聖書研究の形成期から切り離して、本節で紹介しなければならない。というのも、彼の努力があったからこそ、中国の聖書研究は国外の聖書研究と接近し、さらにその規模を拡張させることができたからである。

### 2-1 梁工

梁工は朱維之に師事し、1988 年に朱維之が務めている南開大学で文学博士の学位を獲得したが、既に 1987 年から継続的に自分の聖書研究を中国国内の雑誌で発表していた。そして、早くも、1989 年から『聖書の詩』と『聖書文学の紹介』という二つの著作を出版した。前者には朱維之による序が付され、その本の内容について主に旧約における韻文の紹介であると説明されている<sup>(16)</sup>。実際、その本のページはほとんど詩編、エレミヤ哀歌、雅歌、ヨブ記及び箴言の成立と言葉自体の意味の説明になっている。しかし、梁工が同時期のほかの中国聖書研究者と最も異なるところは、古典ヘブライ語と聖書ギリシア語を修得しているということである。そういった意味では、今までの訳文聖書と国外の研究に頼る二次的な研究体制から離脱し、原典に基づいた研究を行うことが出来た。彼は『聖書の詩』の中に、S. Yoder の *Poetry of the Old Testament*<sup>(17)</sup>と C. H. Bullock の *An Introduction to the Old Testament Poetic Books*<sup>(18)</sup>の研究を導入し、ヘブライ語原典のコンテクストを説明した。また、『現代中国語訳聖書(TCV)』と『現代聖書(CLB)』という二つの訳の韻文

を収録し、読者にそれぞれの韻文の訳の差異を示すことによって、原典に対する研究の重要性を訴える努力が伺える。

もう一つの著作『聖書文学の紹介』は梁工の修士論文と南開大学に在籍している間に書いた研究論文から構成されたものである<sup>(19)</sup>。その本は旧約と新約に二分され、前半は主に創造主とダビデを巡る王朝史を中心としている。後半は新約の成立背景とその特徴の説明であり、その中ではコーランへの影響と中国への影響も言及された。

梁工の著作と研究は、聖書の物語より韻文の方に関心を寄せている。また、彼は創造主を称える韻文を好まない。彼自身の感想として、創造主である神は神聖化された倒錯的なヘブライ精神の象徴に過ぎないと明言している<sup>(20)</sup>。にも拘らず、聖書における文学的な価値は否定できないとして、研究を続けてきた<sup>(21)</sup>。梁工の無神論的な立場は、新約聖書及びそれ以前のギリシア神話に対しても変わらなかった。

いずれにしても、梁工の学術に対する厳格な態度は、中国の聖書研究に大きな貢献を果たしたことは否めない。彼は中国最初の聖書である『聖書百科辞典』<sup>(22)</sup>を編集した後、中国の開封市にある河南大学で講義しつつ、聖書研究をし続けた。そして、2001年、同大学の聖書文学研究所(The Institute for the Study of Biblical Literature)の設立に際し、梁工はその研究所の所長に任命された。

聖書文学研究所が創立された際に、研究所は主に4つの研究方針を示した<sup>(23)</sup>。

- ①聖書の基本的な特徴と表象：聖書の働き、概念、主題、構造、文体、原型、修辭、言語、成立背景などの研究
- ②聖書を経由したユダヤ教文学と基督教文学の比較研究、及び中国文学との関連付け
- ③聖書の漢訳及び中国での普及：聖書の漢訳の歴史、翻訳原理、訳本と翻訳者などの研究
- ④聖書の聖書解釈史、批判史：西洋の聖書研究の歴史と現状、理論と方法、重要な著作と有名な学者に関する研究

以上の研究方針のもとで、同研究所は聖書研究に関連する多くの書籍の執筆と翻訳を主導した<sup>(24)</sup>。しかし、中国の聖書研究にとって最も重要なのは、次節で紹介する中国最初の聖書研究専門の学術誌『聖書文学研究』の創刊である。

## 2-2 『聖書文学研究 (Journal for the Study of Biblical Literature, JSBL)』

2007年、河南大学の聖書文学研究所を主体として、香港中文大学崇基学院神学院(Divine School of Chung Chi College, The Chinese University of Hong Kong)、香港漢語基督教文化研究所(The Hong Kong-based Institute of Sino-Christian Studies)、アメリカ創新基督教学術研究センター(Seekers Christian Research Center, USA)の協力のもとで、学術誌JSBLが中国国内で創刊された。創刊した当時は年刊の形式で出版したが、2014年から春と秋の年二回刊になり、2017年の秋から国際版も共に発刊され始めている。

2007に発行された第一号の最初に梁工による創刊の辞が書かれている。その中で彼は朱維之以降から2007年までの聖書研究の成果を肯定しつつ、他の西洋諸国と比べてまだ遅れていることに言及し、JSBLがこういった研究上の差をより多くの中国研究者に意識させつつ研究水準の向上を目指す学術誌であると強調した<sup>(25)</sup>。

*JSBL* に採用された論文は主に河南大学の聖書文学研究所の研究方針に従い、論文の研究内容によって、幾つかのコーナーに分類される。よく見られるコーナーは「旧約研究」、「新約研究」、「専門研究」、「聖書と文学」、「聖書と翻訳」、「聖書と歴史」、「聖書と神学」、「聖書解釈学」、「聖書修辞学」、「有名研究者の紹介」、「若手研究者の研究ノート」であるが、それらのコーナーは必ずしも毎号に乘せられるわけではない。そして、毎号の論文の採用とコーナーの構成に関して、河南大学聖書文学研究所への問い合わせの返答によれば、*JSBL* の編集者の一部を含む、26 人の学術委員が、国内及び国外の聖書研究の動向を調べながら、毎号の内容を構成する論文を考えている。実際、その 26 人の学術委員会のうち 18 人の学者が国外の研究機関に所属している<sup>(26)</sup>。その 18 人が所属している研究機関が所在している国の構成は、香港 2 人、台湾 1 人、シンガポール 1 人、イスラエル 1 人、スロヴァキア 1 人、ドイツ 1 人、イギリス 2 人、アメリカ 8 人、オーストラリア 1 人となっている。また、創刊された 2007 年から、毎号の *JSBL* は約 20 本前後の論文が掲載されている。2014 年の春から年二回刊に増刊したにも拘らず、論文の数は 20 本前後に維持されているが、2017 の国際版の発刊に伴い、毎号の論文は 15 本前後まで減少した傾向がみられる。関係者に問い合わせた限り、それは研究数の減少というより国際版を含む編集の作業量に対する致し方ない措置である。

### 2-3 *JSBL* から見る中国の聖書研究の動向

梁工が強調した聖書研究上の遅れを意識させるために、ほとんど毎号の *JSBL* には国外の聖書研究の訳文が掲載されている。それ以外にも、聖書研究に関するシンポジウムや学術集会の概要も時々見られる。こういった内容は、中国における聖書研究の動向の一面を知ることができる。実際 2007 年から 2018 年春までの合計 16 巻の *JSBL* の中に、合計 8 回の学術集会の概要が紹介された。紙幅の関係で、これらの内容を詳しく紹介できないが、それらの概要を更に統合した形で 2008 年から 2016 年までの研究関心を説明する。

2008 年から 2016 年までの間の学術集会では、全体として、聖書漢訳及びその周辺に関する研究がよく言及される。また、中国における多様の宗教經典との比較を通して、聖書を再解釈する方法——比較テキスト解釈 (cross-scriptural interpretation) の応用研究も 2016 年から頻繁に見られる。ところが、2008 年ソウルで行われたシンポジウム「定位と接近——アジア文化における聖書 (Mapping and Engaging: the Bible in Asian Cultures)」<sup>(27)</sup>以降、公式の記録を見る限りでは、日本と韓国の聖書研究者との交流を確認することができない。同じ東アジアの国として、日本と韓国は 19 世紀後半から既に聖書研究を取り行い、数多くの研究成果を残したが、現段階では、日韓の聖書研究の紹介はまだ言及されていない。つまり、中国の聖書研究者たちに、西洋の聖書研究との差を具体的に意識させる他に、身近なところである日韓による 100 年の聖書研究の差を意識させることも彼らの課題の一つと言えるかもしれない。

### 3. 他の研究分野との関連から見る聖書研究の可能性

中国における聖書研究の発展過程においては、豊富な文学の種類を有しているヘブライ語聖書への関心が支配的であった。新約聖書に対する関心の欠如は、近代から続く中国と西洋諸国との衝突に一因がある。長きにわたる歴史的な経験は「西洋諸国＝基督教」という図式を国民の精神に植え付け、ある種の抵抗感を生じさせた。しかし、今日の中国における基督教の拡大及び社会のグロー

バル化の展開によって、西洋精神を理解することの要請が、中国における各研究分野から少しずつ浮上してきた。本節では、このような背景の中で、今後の中国において聖書研究がいかなる研究分野に寄与しうるのかを考察する。

### 3-1 基督教研究

周知のように、基督教研究において、聖書は無視できない存在である。聖書研究と基督教研究は不可分ともいえる関係にある。そのため、中国の聖書研究の問題点を整理することによって、基督教研究の問題点を指摘できるだろう。

ここで、シンガポールの神学者・聖書学者である鐘志邦が、2012年に *JSBL* で発表した論文「中国学術界における“聖書学”:回顧と展望(中国学術界的“圣经学”:回顾与展望)」<sup>(28)</sup>を参照しよう。この論文は、中国学術界における基督教研究の受容と聖書研究との関係及びその問題点を整理したものである。彼は華僑三世でもあり、1998年から北京大学をはじめ、中国国内の大学で基督教に関する講義を担当してきたため、中国の大学における基督教研究の発展を身近に見た一人といえる。

彼は論文の冒頭で、1950年から1978年までの学術界の頹廃的な状況を説明し、1980年の朱維之の論文「ヘブライ文学導入」の発表を一つの学術的な転換点として見なした。更に、それ以降に起きたもう一つの転換点として、1998年に中国社会科学院(CASS)によって世界宗教研究所基督教研究室が設立され、同研究室によって中国における最初の基督教関連の研究叢書である『基督教研究』(1999)<sup>(29)</sup>の出版が始められたことを指摘している。彼によれば、国家の研究機関に基督教研究所が設立されたことは、権威性を持つ成果がこの研究分野に求められるようになったことを意味している。以上のことを指摘した後、彼は中国の基督教研究の位置付けと現状を述べている。

第一に、社会的機能について。鐘によれば、基督教研究は、中国に対して国際社会における文化交流の土台を提供すると同時に、基督教思想による人文教育を促進できる<sup>(30)</sup>。つまり、基督教研究は単なる学術ではなくある種の戦略的な機能も有していると鐘は主張した。

第二に、鐘は中国国内の基督教研究と聖書研究の間に知的な交流がまだ少ないという問題も指摘した。彼は北京大学で担当している「基督教思想史」及び清華大学で担当した集中講義「ヨハネ福音書」を通して学生たちと交流することができた。そして、これらの交流の中で、基督教研究のみならず、大学生の教養としてのリベラルアーツにおいても、聖書との接触があまりにも少ないと実感した。彼によれば、ほとんどの参加者は歴史学と哲学の学生で、豊富な歴史知識と優れた思考力を有しているものの、聖書自体を一度も手に取ったことがない。それは、中国の一般の書店では基督教信仰と思われる聖書が販売されていないため、一般の読者は聖書に触れる機会がなかなかないためだと彼は考えている。一方で、鐘は『欽定訳聖書(KJV)』を例にして、聖書を読むことがある種の教養として、信仰者に限らず、一般の人に広く読まれているということを指摘した<sup>(31)</sup>。聖書への直感的な理解は初期基督教の神学及び哲学の源泉の一つであると同時に、文化、生活的な基盤でもあるという重要な働き果たしていた。従って、「聖書抜き」の状況は、中国国内の基督教研究のみならず、歴史や哲学などをはじめとする西洋諸学研究への影響も決して軽視できるものではない。

最後に、鐘は出版物についても言及している。彼によれば、中国人独自の聖書の研究書の出版はまだ少ない。実際、彼が2010年に出版した『ヨハネ福音書注解』<sup>(32)</sup>の表紙には、「中国人による初めての聖書注解」という宣言文が書かれている。彼はこの宣伝文を、中国に独自性を持つ研究は少

ないという状況を暴露したものと理解している。鐘が指摘したように、確かに、そういった聖書研究及び出版物が少ないという事態は、一般人が聖書と接触する機会が少ない原因の一つではないかと推察せざるを得ない。

### 3-2 現代中国の霊性文学<sup>(33)</sup>研究

中国の基督教研究には聖書研究の成果が十分に反映されていないというのが鐘志邦の指摘であるが、同様の指摘が文学研究からも提出されている。

2015年10月、「基督教文化と現代中国文学フォーラム」が上海師範大学で行われた。上海師範大学の教授であると同時に、上海文学研究センターのセンター長も務めている楊剣龍は、基督教文化と現代中国文学との関係に関する研究の現状と問題点を整理した<sup>(34)</sup>。その論文の第一節は当時の中国国内の霊性文学研究の学位論文を紹介する内容である。第二節と第三節において、楊は海外、もしくは台湾の作家及びそれぞれの文学作品の概要に触れ、現代中国の霊性文学という文学ジャンルの作品数の増加を明らかにした。中国における霊性文学の増加は現代中国の文学上の自由の一側面であると同時に、1990年以降、凄まじい経済発展を成し遂げた中国全体が少しずつ内面精神の上昇を求め始めた結果の一つではないかと楊は分析している。

論文の第四節と第五節では、「改革開放」以降に出現した霊性文学の代表者である北村と史鉄生に関する研究が重点的に説明されている。この二人の作家による霊性文学は、「文革」の時代を舞台に、その時代に加担する者への批判と、その時代にいるからこそ生成しうる基督教の信仰を描く作品であるため、近年の内面精神の豊かさを追求する霊性文学とは異なる政治的な重苦しさを持っている。楊が、北村と史鉄生の作品についてそれぞれ単独に節を立てて紹介したことからも、その二人の作品の重要性が窺える。

最後のまとめの中で、楊は霊性文学への研究の現状に対して、中国研究者たちによく見られる研究上の「弱点」を指摘した。即ち、中国の霊性文学の研究者たちが一般に、研究過程で宗教及び神学的な理論の応用を意識していないことである。中国の文学研究者は、多くの場合は宗教者ではなく、信仰生活に対する直接的な経験が欠如しているため、霊性文学に登場する宗教者、もしくは宗教的な心理活動を持つ人物に対する考察は十分なものとは言えない。このような理由から、楊は霊性文学の研究者に対して、聖書研究に関心を持つことを促している。つまり彼の主張によれば、信仰から独立した神学もしくは聖書に関する知見は、中国文学者たちに霊性文学研究に何かしらのアプローチを提供できるのである。

楊剣龍の指摘は、鐘志邦による基督教研究についての指摘と同様に、霊性文学研究においても神学もしくは聖書に関する教養的な意味での知見の需要が存在していることを示唆するものである。他方、中国における霊性文学の拡大は、別の面から見れば、中国で入手困難である聖書の代わりに間接的に聖書の思想が伝達されるようになったことを意味している。そうであれば、聖書の思想を霊性文学の読者に直接的に再認識させるという役割を含めて、聖書研究の意義は、より広い社会との関わりから位置づけられなければならない。

### まとめ

本稿は中国の1980年以降の聖書学研究の概要である。それらを、1980年から90年代の聖書研

究の形成期、2000 年からの海外への展開期、聖書研究の中国における位置付け及び他の研究分野との関連性という三つの部分に分けて調査した。

まず、1980 年から 90 年代の聖書研究の形成期に関して、朱維之と Gálik の論文を軸に、主に聖書における韻文研究を中心とし、聖書の神話研究も含む初期段階としてまとめた。

続いて、梁工の研究と *JSBL* の創刊を中国の聖書研究の転換期として、それ以降の聖書研究のシンポジウムを手掛かりに、2008 年から 2016 年までの国際的な拡大傾向を整理した。その中で、聖書の漢訳研究が依然として相当な関心を引き寄せていると同時に、中国の諸宗教の経典を使用した比較テキスト解釈研究も重視され始めている。しかし残念なことに、中国国内の聖書研究の全体において、聖書考古学に関する研究が見当たらない。日本では聖書考古学に関する優れた実績を有しているため、日本や韓国の聖書研究者との交流はより積極的に視野に入れる必要がある。

最後に、これからの聖書研究の課題として、中国の聖書研究が拡大する過程の中で、基督教研究との関係及び霊性文学研究からの要請を視野に入れるべきであることを指摘した。

## 註

- (1) 黄心川,《百科全书式的学者朱维之先生》,载《中国景教》,北京:东方出版社,1993,第10页。
- (2) 朱維之の自伝によれば、『基督教と文学』の原稿は第二次世界大戦中の上海で既に完成していたが、当時の日本軍は上海での書籍出版及びその販売を規制していたため、友人を頼って秘密裏に少数で製本したが、発売はしなかった。しかし、それらの本は戦争によって焼失したため、市販された初版は1992年の上海書店出版社によるものである。にも拘わらず、中国学术界は『基督教と文学』が1941年に完成されたと考えている。朱維之,《朱維之自传》,载《当代文学翻译百家谈》,王寿兰主编,北京:北京大学出版社,1989,180-185页。
- (3) ZHU Weizhi, “A Short Introduction to Hebrew Literature: Exploring the Literature of the Old Testament”, in *FLS*, no. 2, 1980, pp. 106-118.
- (4) ZHU Weizhi, “Characteristic Features and the Place of the Bible”, in *FLS*, no. 4, 1982, pp. 45-49.
- (5) Ibid., p. 46. また, F・エンゲルス(秋間実, 渋谷一夫訳)『「新メガ版」自然の弁証法』新日本出版社, 1999年, 83-106頁, 「序論」を参照せよ。
- (6) Marián Gálik, “The Reception of the Bible in the People’s Republic of China (1980-1992): Observations of a Literary Comparatist”, in *AAS*, no. 4, 1995, pp. 24-46.
- (7) NIU Yongmao, “Notes on the Bible”, in *FLS*, no.1, 1985, pp. 31-38.
- (8) ZHU Yunbin, “The Song of songs in Bible: A Theory and Some Opinions Concerning It”, in *Bulletin of Xinyang Normal University, Humanistic Science*, no. 1, 1985, pp. 61-69. And no. 2, 1985, pp. 107-111.
- (9) ZHU Yunbin, “Preliminary Study on the Primitive Fiction in the Bible”, in *Bulletin of Xinyang Normal University, Humanistic Science*, no. 4, 1985, pp. 108-115, p. 33.
- (10) DU Benhai, “Don’t Confuse Two Versions of the Creation Myth in the Old Testament”, in *Bulletin of Northeast Normal University*, no. 6, 1986, pp. 79-84.



- (11) DU Benhai, “A Study in Refined Essence of the Six Days Creation from the Old Testament”, in *Social Sciences Front*, no. 1, 1986, pp. 284-288.
- (12) DU Benhai, “The Aesthetic Dimension of the Polytheistic Myth of the Creation in the Old Testament”, in *Forum on Folk Literature*, no. 5, 1987, pp. 23-29.
- (13) Ibid., p. 29.
- (14) LIU Lianxiang, “The Myth of Eden in the Bible and the Mother Archetype”, in *Foreign Literature Review*, no. 1, 1990, p. 36.
- (15) Ibid., p. 36.
- (16) 梁工：《圣经诗歌》，天津：百花文艺出版社，1989。
- (17) S. Yoder, *Poetry of the Old Testament*, Herald press, 1948.
- (18) C. H. Bullock, *An Introduction to the Old Testament Poetic Books*, Moody Publisher, 1979.
- (19) 梁工：《圣经文学导读》，桂林：漓江出版社，1991。
- (20) 梁工：《圣经诗歌》，第 27 页。
- (21) Ibid., p. 28.
- (22) 《圣经百科辞典》，梁工主编，沈阳：辽宁人民出版社，1991。
- (23) 聖書文学研究所の公式ウェブサイトを参照せよ。<http://sjwxyj.henu.edu.cn/> (2019 年 2 月 24 日閲覧)
- (24) 2000 年から 2018 年の 9 月までに論文集 9 冊，個人著作 6 冊，翻訳書 4 冊，事典 1 冊，叢書 1 シリーズ（全 6 巻），合計 27 冊の書籍が出版された。これらの書籍のはいずれも聖書と関係しているものである。同じく聖書文学研究所の公式ウェブサイトを参照せよ。
- (25) 梁工，《创刊词》，载 *JSBL*, 2007, 第 1 辑，1-4 页。
- (26) 同じく聖書文学研究所の公式ウェブサイトを参照せよ。
- (27) 游斌，《定位与参与：亚洲文化处境下的圣经研究—首尔学术会议综述》，载 *JSBL*, 2009, 第 3 辑，393-395 页。
- (28) 钟志邦，《中国学术界的“圣经学”：回顾与展望》，载 *JSBL*, 2012, 第 6 辑，1-33 页。
- (29) 《基督教研究》，卓新平，许志伟主编，北京：社会科学文献出版社，1999。第 1 辑。
- (30) 钟志邦, op. cit., pp. 6-13.
- (31) Ibid. pp. 13-14.
- (32) 钟志邦：《〈约翰福音〉注解》，上下卷，上海：三联书店出版社，2010。
- (33) 文学者施璋が提唱した用語。1980 年以降の「罪意識」，「贖罪」，「救済」などの題材を用いた中国文学作品を指している。これらの題材を明確に基督教の立場から議論する作品もあれば，基督教，もしくは他の特定の宗教を明言せずに，これらの題材のみを取り扱う作品も存在する。前者の代表は北村と史鉄生であり，後者は莫言が代表的である。王本朝，《从灵的文学到灵性文学—中国文学的神性资源问题》，载《东京文学》，2008(11)，58-62 页。
- (34) 杨剑龙，《基督教文化与中国当代文学关系研究与思考》，载 *JSBL*, 2015(1)，第 10 辑，264-288 页。

## 参考文献

### 論文

- DU Benhai, "A Study in Refined Essence of the Six Days Creation from the Old Testament", in *Social Sciences Front*, no. 1, 1986, pp. 284-288.
- DU Benhai, "Don't Confuse Two Versions of the Creation Myth in the Old Testament", in *Bulletin of Northeast Normal University*, no. 6, 1986, pp. 79-84.
- DU Benhai, "The Aesthetic Dimension of the Polytheistic Myth of the Creation in the Old Testament", in *Forum on Folk Literature*, no. 5, 1987, pp. 23-29.
- LIU Lianxiang, "The Myth of Eden in the Bible and the Mother Archetype", in *Foreign Literature Review*, no. 1, 1990, p. 36.
- Marián Gálík, "The Reception of the Bible in the People's Republic of China (1980-1992): Observations of a Literary Comparatist", in *AAS*, no. 4, 1995, pp. 24-46.
- NIU Yongmao, "Notes on the Bible", in *FLS*, no.1, 1985, pp. 31-38.
- ZHU Weizhi, "A Short Introduction to Hebrew Literature: Exploring the Literature of the Old Testament", in *FLS*, no. 2, 1980, pp. 106-118.
- ZHU Weizhi, "Characteristic Features and the Place of the Bible", in *FLS*, no. 4, 1982, pp. 45-49.
- ZHU Yunbin, "Preliminary Study on the Primitive Fiction in the Bible", in *Bulletin of Xinyang Normal University, Humanistic Science*, no. 4, 1985, pp. 108-115, p. 33.
- ZHU Yunbin, "The Song of songs in Bible: A Theory and Some Opinions Concerning It", in *Bulletin of Xinyang Normal University, Humanistic Science*, no. 1, 1985, pp. 61-69. And no. 2, 1985, pp. 107-111.
- 王本朝,《从灵的文學到靈性文學—中國文學的神性資源問題》,載《東京文學》,2008(11),58-62頁。
- 楊劍龍,《基督教文化與中國當代文學關係研究與思考》,載《JSBL》,2015(1),第10輯,264-288頁。
- 游斌,《定位與參與:亞洲文化處境下的聖經研究—首爾學術會議綜述》,載《JSBL》,2009,第3輯,393-395頁。
- 鍾志邦,《中國學術界的“聖經學”:回顧與展望》,載《JSBL》,2012,第6輯,1-33頁。

### 研究書及び論文集

- C. H. Bullock, *An Introduction to the Old Testament Poetic Books*, Moody Publisher, 1979.
- S. Yoder, *Poetry of the Old Testament*, Herald press, 1948.
- F・エンゲルス(秋間実,渋谷一夫訳)『「新メガ版」自然の弁証法』新日本出版社,1999年。
- 黃心川,《百科全書式的學者朱維之先生》,載《中國景教》,北京:東方出版社,1993。
- 梁工:《聖經詩歌》,天津:百花文藝出版社,1989。
- 梁工:《聖經文學導讀》,桂林:漓江出版社,1991。
- 鍾志邦:《〈約翰福音〉注解》,上下卷,上海:三聯書店出版社,2010。
- 朱維之,《朱維之自傳》,載《當代文學翻譯百家談》,王壽蘭主編,北京:北京大學出版社,1989。
- 《基督宗教研究》,卓新平,許志偉主編,北京:社會科學文獻出版社,1999。第1輯。

辞典

《圣经百科辞典》，梁工主编，沈阳：辽宁人民出版社，1991。

ウェブサイト

聖書文学研究所の公式ウェブサイト <http://sjwxyj.henu.edu.cn/>（2019年2月24日閲覧）